

「涅槃会」は、お釈迦さまの死をしのぶ法要です。インドのクシナガラという場所でお釈迦さまが亡くなられた、その情景を描いた涅槃図を掲げ、二月十五日に供養をするのです。

お釈迦さまの死の直前から亡くなるまでのことを記した『大般涅槃経』というお経があります。そこには、お釈迦さまの死に臨む様子がくわしく記されています。

その生涯における最後の旅の途中、お釈迦さまはヴェーサーリーという町に滞在しました。

滞在中、お釈迦さまは、病のために激しい痛みにさいなまれます。その苦痛を耐え忍び、やがて回復をみますが、お釈迦さまは、ご自分の死が近いことを知ります。

ある日のこと、托鉢より戻り食事を終えたお釈迦さまは、おつきのアーナンダと共に、休息をとっていました。休息を取りながら、ヴェーサーリーの町を眺めていました。そして、アーナンダに語りかけます。

「アーナンダよ、ヴェーサーリーは美しい。ウデーナの聖なる樹も、ゴータマカの聖なる樹も、すべてのものが美しく、心楽しい。」

お釈迦さまは、若き日々に「生老病死」の苦しみに直面し、そこからの解放を求めて出家をしました。その苦しみをみつめ続けたお釈迦さまが、生涯の最後に、眼前に広がる風景すべてを、「美しく、心楽しい」と言いながら眺めているのです。

滞在を終え、ヴェーサーリーを去る日がやってきます。この町は、お釈迦さまがたびたび訪れ、修行した場所も多くあるところですよ。お釈迦さまにとって、とても身近な町だったのです。

「これが私がヴェーサーリーを見る、最後となるだろう。」

そう言って、お釈迦さまはゆっくりと、全身をめぐらして、ヴェーサーリーの町をふりかえったのです。懐かしい風景を、お釈迦さまは、どのような思いで眺めたのでしょうか・・・

お釈迦さまはこの後も旅を続け、ヴェーサーリーより北西にある、クシナガラで死を迎えられるのです。

死に臨むお釈迦さまから、私たちは、さまざまなものを感じ、学ばなければなりません。なぜなら、それもまた、お釈迦さまの死をしのぶことだからです。

ねはんえ
涅槃会は、お釈迦さまの死をしのぶ法要を営む日であると同時に、お釈迦さまの死
への臨み方に、深く思いを馳^はせる日でもあるのです。

— 終 —